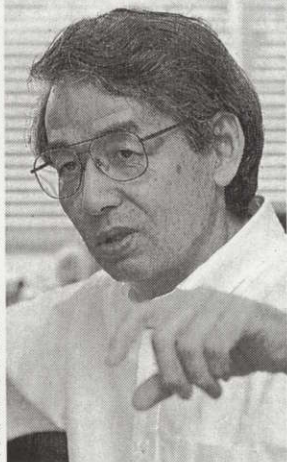


新 防災力 あすに備える

名古屋大地震火山防災研究センター
安藤 雅孝教授

あんどう・まさたか 専門は地震学。海底の地殻変動を検出する新しいシステムの開発に取り組んでいる。中央防災会議専門委員、62歳。



日本列島の地下では、陸のプレートの下に二つの海のプレートが沈み込んでいる。その境界では、引きずり込まれた陸のプレートがひずみため、それが限界に達して反発すると地震が起きる。こうした海溝型の巨大地震は繰り返し起きて、次の巨大地震が発生するまでの間に、内陸部では阪神大地震のような直下型の地震が幾度か起きるといわれている。今回は、関西を襲う地震のメカニズムを考えてみる。(編集委員・野呂雅之)

—フィリピン海プレートが陸側に沈み込む海底のくぼみ「南海トラフ」に沿って、マグニチュード8級の海溝型地震が過去に繰り返し起きていますね。図参照。

「684年の白鳳地震から10回前後起きており、それは古文書の前記述や遺跡に残された液状化現象などから分かっています。1707年の宝永地震は東海、東南海、南海の三つの地震がほぼ同時に起きたと考えられ、断層の長さに及び、巨大地震です。その147年後には、安政東

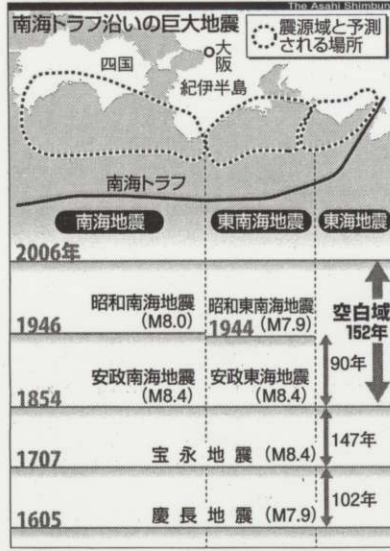
いつ起きる巨大地震

海地震と安政南海地震が2時間おいて連続して発生しました。昭和の東南海地震が起きたのは安政地震が、その前の宝永地震や安政地震に比べると地震のエネルギーは小さく、津波の規模も小さかった。

規模や間隔過去から学ぶ

震から90年後のことです。安藤さんは「過去の地震を知ることが大切だ」と言われていますが、どういう意味ですか。

「次の地震が起きるまでの間隔は、前回の地震の大きさによって決まるようです。昭和の東南海・南海地震は確かに巨大な地震です。そのため、安政地震から昭和・東



いすからね。南海トラフの地震でも、よくわからないことがいくつもある。例えば、1605年の慶長地震では津波の被害は大きかったのですが、地震の揺れの被害を示す記録が残っていない。そのメカニズムをうまく説明しようとしても難しい。非常に限られた過去の未来を予測しようとしているので、地震の発生時期は幅をもたせるべきでしょう。

—東海地震の震源域は安政地震から150年間動いていない。「あす起きてもおかしくない」といわれたから30年たちました。

「内陸地震の発生確率は30年たつてもまず変わらないが、海溝型地震はどんどん変わっていく。この30年でプレート境界のひずみがよりたまって、発生の可能性がだんだん高くなってきている。過去の例をみると東海地震は単独で発生したことはなく、東南海・南海地震と連動して起きている。そう考えると、東海地震が起きれば、東南海・南海地震も起きると予測して防災対策をとるべきです」

「関西は地震の多いところだ」といって驚く人もいます。「関西って地震がなかったら存在しない場所ですよ。京都は東に花折断層から続く桃山の断層、西は嵐山の断層に囲まれた地形です。地震によってまわりが隆起し、低かったところが相対的に沈んだ。沈むと、必ず川は埋めようとする。埋められて平らになったところに街ができる。神戸も断層がなかったら、山からすぐ海になって、人が住めない。あちこちに活断層があり、地震によって出来たのが関西の都市です。だから、いつも言っているのは『地震はいつ、どこで起きるかわからない』ということです」

関西学院大学災害復興制度研究所と朝日カルチャーセンターが共催で、市民のための防災・危機管理講座「関西を再び地震が襲うとき～あなたの備え

は」を開いています。12回シリーズの第4回は8月9日の開講で、講師は安藤雅孝さん。申し込みは同カルチャーセンター(06・6222・5222)へ。